

東洋紡関連社史・団体史及び関連人物伝記案内 (1/2)





このリストは渋沢史料館企画展「近代紡績のスズメー渋沢栄一と東洋紡」の関連情報として情報資源センターが作成したものです。http://www.shibusawa.or.jp/museum/special/kikaku2014_02_bunken.pdf

「詳細」欄の青い矢印のアイコンをクリックすると、ウェブ・ブラウザが起動して「情報資源センター・ブログ」のエントリーが表示されます。

【東洋紡関連社史・団体史】

凡例：『書名』編著者、出版者、出版年（ページ数等。複数のページ付は分けて記載）	詳細
<p>『創業二十五年沿革略史』大阪紡績、1908（[20]p(図共), 図版40枚）</p> <p>明治以降各地に設立された紡績会社はいずれも小規模で、大規模な紡績会社設立の必要性を強く感じた渋沢栄一は有志と図り、英国留学中の山辺丈夫(やまのべ・たけお、1851-1920)に紡績業の実況研究を要請。紡績技術も学んだ山辺が帰国し、資本調達と工場建設の上1882年(明治15)大阪に大阪紡績会社創立、栄一は相談役。中国・インドから棉花を輸入し綿布を輸出するまでに成長、日清日露戦争を経て発展する。大阪紡績株式会社の25年史は沿革と現況を7区分で記述し、工場写真を多く掲載。[1914年(大正3)三重紡績と合併し東洋紡績(株)となる]</p>	
<p>『東洋紡績株式会社要覧：創立二十年記念』東洋紡績株式会社編、東洋紡績、1934（6, 114, 55p, 図版13枚）</p> <p>渋沢栄一指導の下に発展した三重紡績、大阪紡績両社は1914年(大正3)合併し、東洋紡績(株)創立。栄一は相談役。創立20年を記念して出版された社史は天金が施され、前半に沿革と製品設備等の現況を簡潔に記述し、後半に詳細な統計とカラーの図解を掲載。本文中にも多くの図版を取り入れた編集で、見返しには明治初頭の紡績工程や機械を描いた版面を使用。</p>	
<p>『東洋紡績七十年史』東洋紡績株式会社東洋紡績七十年史編修委員会編、東洋紡績、1953（12, 767, 13p, 図版23枚）</p> <p>日本初の蒸気を動力とした大規模な紡績会社である大阪紡績が、民間の会社組織として1882年(明治15)創業、渋沢栄一は発起人、相談役。同年創業の三重紡績所は水力利用の小規模な紡績業を営んだが、栄一の助言により1886年(明治19)新たに株式組織の三重紡績会社を設立しこれに併合。両社は1914年(大正3)合併し、東洋紡績(株)が誕生した。創業からの70年史は、歴史、現況、資料の3篇からなる。歴史篇では大阪紡績と三重紡績の創立から合併後の発展、そして多くの困難を乗り越え戦後の再建までを20章に詳述。現況篇には教育研究施設や工場、本支店それぞれの足跡をまとめ、歴代商標等のカラー図版を掲載。資料篇には廃止工場の概要や各種統計、関係会社総覧等を載せている。人名、会社工場名、団体名索引付。見返しは製品のリバーレース写真。</p>	
<p>『百年史：東洋紡 上・下』東洋紡績株式会社社史編集室編、東洋紡績、1986（2冊）</p> <p>東洋紡績が日本初の民営紡績会社として発足してからの100年史。沿革と資料を上下2巻におさめている。上巻は前身の大阪紡績と三重紡績が1882年(明治15)に創業してから、両社合併で1914年(大正3)設立した東洋紡績の戦前の興隆と、終戦後化繊に進出した1956年(昭和31)までを収録。下巻は以降の四半世紀に拡大した合繊からプラスチック事業など、非繊維事業への歩みに触れる。資料には定款や役員任期表の他、詳細な系譜図や廃止事業場一覧なども掲載。2巻で計1200ページを超える大作で、各巻末に主要人名と主要会社・事業所名索引付。</p>	
<p>『東洋紡百三十年史』東洋紡株式会社編、東洋紡、2015（1242p）</p> <p>2012年(平成24)に創立130年を迎えた東洋紡の130年史で、沿革編と資料編を1冊に収めている。沿革編は4章からなり、第1章「つむぎ織り染めなす夢の一〇〇年」は既刊の70年史と100年史を元に新たに書き下ろして、1982年(昭和57)までの100年を綴る。続く30年間、常に市場の変化に対応し新製品新事業を創出してきた企業活動は、第2～4章に詳述。第2章「繊維の安定収益構造と非繊維の拡大を目指す：1982-1989」では、繊維事業の構造改革とフィルム事業、バイオ・医療事業等の模索に触れる。第3章「大改革への挑戦：1989-2007」では、縮小する繊維事業と拡大するフィルム、バイオ、医薬、膜事業等を描く。第4章「二正面作戦から新たな成長へ：2007-2011」では、CSRも踏まえたグローバルな事業展開を記し、飛躍への布石について語っている。資料編に収められた各事業所のデータには、それぞれの所在地と写真に加え沿革と系譜図も収録。人名と事業所名索引付。編纂に関わった外部研究者4名と社内担当者81名の氏名と分担を編集後記に記載。表紙は自社製クロスで、同じく自社製のラミネートフィルムをカバーに使用。全文を収録したCD-ROM付。</p>	
<p>『本邦綿糸紡績史 第1巻-第7巻』絹川太一著述、日本綿業倶楽部、1937-1944（7冊）</p> <p>中外商業新報社で紡績事情を研究し、日清紡績等で紡績業に従事した絹川太一が日本綿業倶楽部に入り、その研究成果を出版した著作。機械紡績以前の糸車の時代から書き起こし、始祖時代、奨励時代、勃興時代、濫興時代、という順で全国約80の紡績会社の沿革をまとめている。会社の掲載順は、始祖時代は創立順、他は調査順。各社ごとの章の他に時代ごとの綿業の状況を記述した章も含み、1937年(昭和12)から1944年(昭和19)までに7巻を刊行。各巻末に年譜と事項索引付。凡例は第2巻巻頭にあり。</p>	
<p>『日本綿業倶楽部五十年誌』日本綿業倶楽部、1982（256p, 図版8枚）</p> <p>綿業の中心大阪に関係者の倶楽部をという、東洋紡績(株)役員の岡常夫(1863-1927)の遺志を継ぎ、大阪の綿業者らは1928年(昭和3)に日本綿業倶楽部を創立。渋沢栄一は名誉顧問に推される。1931年(昭和6)には船場に綿業会館が竣工。会員の親睦活動の他、機関誌『綿業時報』や『内外綿業年鑑』『本邦綿糸紡績史』を次々発行。会館には大日本紡績聯合会が事務所を置き、多くの海外使節団が来館し綿業者と交流する。戦時下1943年(昭和18)に綿業協会と改称。戦後1950年(昭和25)に名称を(社)日本綿業倶楽部と復旧する。会館は占領期に接収されるが、返還後は内外の関係者に大いに利用され、2003年(平成15)重要文化財の指定を受ける。50年史は草創期、非常時下、戦後復興という3つの章からなり、巻末に座談会や回顧録を置いている。[2012年(平成24)一般社団法人へ移行]</p>	
<p>『紡協百年史：紡績協会創立100年記念』日本紡績協会、1982（159p, 図版[1]枚）</p> <p>明治期各地に設立された紡績会社は技術と経営の知識経験を相互に交換するため、1882年(明治15)大阪に紡績聯合会を結成。1888年(明治21)大日本綿糸紡績同業聯合会、1902年(明治35)大日本紡績聯合会と改称。綿糸紡績に関わる内外事情を紹介する月報を刊行し、綿花綿糸輸出免税に関する運動や操短に取り組むなど、紡績業の興隆に伴い業界の発展に寄与する。戦時体制を経て1946年(昭和21)発足の日本紡績同業協会が事業を継承し、1948年(昭和23)日本紡績協会となる。紡績聯合会設立から100年を記念して出版された本書は、「戦前の大日本紡績聯合会」「戦時体制下の紡績活動と大日本紡績聯合会の解散」「日本紡績協会の世代」の3部からなる。紡績業の業界団体として取り組んだ種々の事業を、図表を取り入れて時代ごとに簡潔にまとめている。執筆は紡協元専務理事有田円二。[渋沢栄一は本会に相談役として、また東京商業会議所会頭として輸出入税免除請願などに関わった]</p>	
<p>『綿花百年 上巻・下巻』日本綿花協会編、日本綿花協会、1969（2冊）</p> <p>日本に綿花(棉花)が渡来したのは平安時代だが、庶民の衣料として大きく普及したのは江戸時代で、全国で綿花が栽培され、手工業で綿布が生産されていた。明治に入り綿花・綿糸・綿布(綿三品)の輸入が急増し、政府の綿業育成等により大規模な綿紡績会社が設立。輸出も盛んになり多くの綿貿易会社が設立され、1898年(明治31)に国内外の綿花商20社により日本棉花同業協会が発足。以降第二次大戦期に統制会社となるまで、同業者の利益を守り取引週報や月報を発行し、業界発展に貢献した。戦後は綿花輸入業者を中心とする民間団体として1947年(昭和22)に(社)日本棉花倶楽部が発足、輸入棉花輸送に関わる業務と日報・月報を刊行する調査業務を行う。1949年(昭和24)に(社)日本棉花協会と改称。本書は日本棉花協会が創立20周年を機に、明治以降の綿業・綿貿易の歴史を上下2巻にまとめたもので、足跡を記した第1部棉花百年史、業界人20人に取材した第2部棉花人二十話、資料編である第3部参考諸表からなる。第1部には「前史」として明治以前の世界と日本の綿作と綿業の歩みが含まれている。第2部には各文の末尾に筆者略歴を付す。第3部の会員会社要覧には、正・準会員計55社について社歴、綿花部門歴、歴代の綿花担当部長名、綿花部門の特色がまとめられている。[(社)日本棉花協会は2013年(平成25)一般社団法人となる]</p>	

【東洋紡関連人物伝記】

凡例：『書名』編著者、出版年（ページ数等。複数のページ付は分けて記載）	詳細
<p>『孤山の片影』 [山辺丈夫伝記] 石川安次郎著、石川安次郎、1923（8, 2, 18, 18, 320, 2, 188, 12, 19p）</p> <p>津和野藩士山辺丈夫（やまのべ・たけお、1851-1920）は藩校に学び兵役を経た後、1870年（明治3）上京。同郷の学者西周の育英舎で洋学を学び教員となる一方、慶應義塾大阪分校にも学ぶ。1877年（明治10）旧藩主の養子亀井茲明（かめい・これあき、1861-1896）に随行して英国に留学し、ロンドン大学で経済学を学ぶ。紡績業起業を企図した渋沢栄一からの要請を受け機械工学に転じ、紡績工場の見学や実習も行い1880年（明治13）帰国。紡績会社設立の準備を進め、1882年（明治15年）大阪紡績会社創立に加わる。工場設備の整備、原綿輸入、製品輸出などに傾注し事業発展に寄与、1898年（明治31）同社社長。1914年（大正3）三重紡績との合併で東洋紡績が設立されると、山辺は初代社長となり1916年（大正5）まで務めた。大日本綿糸紡績同業聯合会委員長、大阪商業会議所の特別会員を歴任のほか社会公共事業にも尽力し、旧藩主亀井家には生涯忠義をつくす。緑綬褒章受章、従五位。山辺は雅号を孤山と称する趣味人でもあり、文学、演劇、謡曲等にも造詣が深かった。本書は山辺の援助で慶應義塾に学んだ石川安次郎（1872-1925）が、山辺没後に申し出て編纂に当たったもの。山辺の生涯を30章に詳述した伝記「孤山の方影」と、「遺稿」として故人の洋行日記5編と書簡を掲載。続く「渡清記」は、1895年（明治28）紡績聯合会委員として上海に赴いた大阪紡績の山辺と平野紡績の金沢仁作が、清国工業を視察した記録。末尾に置かれた「孤山集」は、山辺と妻定子の詠じた和歌を定子の師佐々木信綱がまとめたもの。なお伝記「孤山の方影」第20章「東洋紡績会社の発展」末尾に、渋沢栄一が「懐旧」として寄せた次の和歌を載せている。「国の為めつくしし君を偲ぶかな清く涼しき月にむかひて」（p193）</p>	
<p>『伊藤伝七翁』 絹川太一編。伊藤伝七翁伝記編纂会、1936（4, 17, 376, 10p, 図版）</p> <p>伊勢の酒造家に生まれた10世伊藤伝七（いとう・でんしち、1852-1924）は、明治に入り父と共に紡績業起業を志す。政府の紡績奨励策により英国より輸入した紡績機の払い下げを受け、三重県川嶋村に水力による工場を建設、1882年（明治15）三重紡績所開業。しかし動力と技術の不足で経営は困難を極め、渋沢栄一の助言により1886年（明治19）新たに株式組織の三重紡績会社を設立、三重紡績所はその附属工場とする。工学博士斎藤恒三を技師長に迎え、英国製蒸気機関と紡績機械を輸入、四日市の新工場で操業開始。合併と増資で業容を拡大し、明治末には国内有数の規模に成長。1914年（大正3）大阪紡績との合併で東洋紡績が設立されると伊藤は副社長となり、1916-1920年（大正5-9）社長。四日市商業会議所副会頭、特別会員、顧問を歴任。紡績業のほかにも各種工業、交通運輸、農事、教育にも尽力し、貴族院議員として国家事業にも寄与した。緑綬褒章受章、正六位。本書は伊藤の十三回忌に際し東洋紡績社長庄司乙吉の監修で出版されたもので、編者は日本綿業倶楽部の絹川太一。生涯を「少年時代」「川嶋時代」「三重紡績時代」「東洋紡績時代」の順に詳述し、更に「諸他の公私事業」「老後と終焉」「栄誉事項」「為人と逸話」の項目別に多くのエピソードをまとめている。本文中に関係者肖像や工場の写真を挟み、巻末に年譜を付す。表紙クロスは東洋紡績特製品。[絹川太一著『本邦綿糸紡績史』（日本綿業倶楽部、1937）第2巻第13章「三重紡績所」には、本書前半部分が多く使われている]</p>	
<p>『伊藤伝七翁』 野村甲子郎[著]。（『竜門雑誌』304-309, 312号連載） 竜門社、1913-1914</p> <p>竜門社発行の『竜門雑誌』に連載された、伊藤伝七（いとう・でんしち、1852-1924）の伝記（未完）。渋沢栄一は三重紡績株式会社常務取締役伊藤伝七の還暦を祝い、1913年（大正2）飛鳥山の自邸にて祝宴を開催。席上伊藤の功労を賞賛した栄一の祝辞に対し、伊藤は川嶋村の三重紡績所創業の発端から、栄一の援助奨励を得て三重紡績会社を創立し、栄一の指導に依って当初の資本金20万円余から増資を重ね1025万円の大会社となった経歴を述べた。これを紡績界の史料として竜門社後進諸氏の参考とするため、竜門社社員野村甲子郎が更に伊藤に取材し諸記録を調査して稿本をまとめた。この成果を7回に渡り『竜門雑誌』に連載したのが本記事。初回巻頭に掲載経緯が記されているが、全7回の内容は伊藤の少年期から1878年（明治11）の紡績機械払下出願まで。酒造業を営む父が明治に入り新産業である紡績業を志し、それを継いで堺紡績所で研鑽をつみ紡績機払下を受けるまでの一連の過程は、伊藤伝七の実業家としての萌芽を伝える十分な内容といえる。</p>	
<p>『阿部房次郎伝』 熊川千代喜編著。阿部房次郎伝編纂事務所、1940（543, 11p, 図版24枚, 折込図1枚）</p> <p>阿部房次郎（あべ・ふさじろう、1868-1937）は彦根藩士の辻家に生まれ、近江商人山中家へ丁稚奉公の後1886年（明治19）上京して慶應義塾に学ぶ。6年後に帰郷し1894年（明治27）山中家の関わる近江銀行の設立に加わり行員となる。1895年（明治28）近江商人阿部家の婿養子となり、製油会社業務などを経て同家経営の金巾製織（株）に勤務。同社は1906年（明治39）大阪紡績（株）に合併し、阿部は専務取締役となる。1914年（大正3）三重紡績と合併し東洋紡績（株）が誕生、阿部は専務となり後に副社長から社長を1935年（昭和10）まで務め、更に没するまで会長として東洋紡の発展に注力した。日本紡績聯合会委員長、大阪商工会議所顧問等を歴任の他、朝鮮半島、江商（株）の経営、製紙業にも関わり、貴族院議員として国政にも寄与。更に実業教育推進のため郡立神崎実業学校や彦根高等商業学校にも関わる。近江銀行が昭和初期に破綻した際は私財をなげうってその整理に奔走。阿部は金巾製織時代から訪中しその書画に触れ、多くの古書古画を入手、画帖『爽籟館欣賞第一輯』を出版（1930）。また収集した中国の封泥591個を帝室博物館に寄贈している。正六位。</p> <p>本書は阿部没後間もなく東洋紡績社長庄司乙吉らにより準備された伝記。1938年（昭和13）の阪神大水害で阿部家資料の多くが流失したが、関係者の尽力で編纂が進められた。紙統制の時節であったが、阿部が関わった王子製紙の好意を得て四周忌を前に刊行された。表紙クロスは東洋紡績特製品。内容は生涯を15章に区切って記述し、東洋紡績時代は更に5節に分けて詳述。最後の「筮洲余韻」は筮洲と号した阿部の横顔を、各界の人々に取材してまとめたもの。附録として長男阿部孝次郎の一文と、阿部の「欧米視察談」を掲載。巻末に年譜を付す。なお巻頭に掲げられた渋沢栄一書簡は1926年（大正15）8月21日付で、同年6月東洋紡績社長に就任した阿部宛に期待を込めて書かれたもの（『渋沢栄一伝記資料』別巻3、p52-53に翻刻掲載）。[附録の「欧米視察談」は、阿部房次郎著、奥田士良編著『阿部副社長欧米視察談』（東洋紡績、1923）を再録したものである。1922年（大正11）4月から12月にかけて行った250日余の欧米視察についての阿部の談話と書簡を収載] [金巾（かなきん）は薄地の平織木綿。インドのカリカット港から積み出されたことからなまってキャラコともいわれる。金巾製織（株）は金巾の製造を目的に設立された会社]</p>	
<p>『岡常夫君：紡績界の隠れたる偉人』 絹川太一編。日本綿業倶楽部、1942（3, 12, 196, 6p）</p> <p>志摩半島出身の岡常夫（おか・つねお、1863-1927）は、1882年（明治15）上京し東京商法講習所に学ぶ。優秀な成績であったが卒業目前に中退し、2年間渡米。帰国後に前橋の生糸商へ就職するが、1890年（明治23）の恐慌で商店が破綻。帰郷して縁のある伊藤伝七の三重紡績会社へ1892年（明治25）入社し、夫人と共に伊藤家に寄寓。大阪出張所主任、本社支配人を務め、日露戦前後の苦境を乗り切る。朝鮮半島への綿布輸出を手掛る三榮綿布組合や、満洲輸出組合の発展にも尽力。国内の多くの紡績会社の合併買収にも関わり、三重紡績は国内有数の規模に成長。1914年（大正3）大阪紡績と合併し東洋紡績が誕生すると、岡は取締役として会社の発展に貢献する。本書は日本綿業倶楽部会長庄司乙吉の命で同倶楽部の絹川太一が編纂した伝記。時節柄か簡素な装丁だが、見返しに庄司の庇護を受けた画家方沼（ほうめい）筆の、岡の故郷大王崎と考えられる風景画を掲載。本文には岡の誕生から永眠までを18章に詳述し、豪放磊落で多趣味な人柄を彷彿とさせる内容。没後を扱った4章には、長年の懸案であった日本綿業倶楽部が故人の遺志を継いで設立され、岡夫人の追善寄附で綿業会館が建設された経緯などを記載。巻末に年譜付。</p>	